

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	A la Recherche du Temps Perduにおける二つの流れ : 「生活者」から「芸術家」へ
Author(s)	清家, 浩
Citation	フランス文学 , 10・11 : 52 - 59
Issue Date	1969-04-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040899
Right	
Relation	



“A la Recherche du Temps Perdu”

における二つの流れ

——「生活者」から「芸術家」へ

清 家 浩

序

従来の Proust 研究家が指摘してきたように“A la Recherche du Temps Perdu”における、いわゆるプルースト的時間というものは、ベルグソンの持続のような経過する時間ではなく、孤立した瞬間々々の連続である¹⁾。従って、この作品の随所にあらわれる登場人物達は、常に、それ以前の出現の際とはまったく異なった相貌のもとにあらわれてくるのである。例えば、Odette de Crécy は、Gilberte の母、Swann に恋する demi-monde の女、Marcel の伯父のひざにすわったバラ色服の婦人 (《la dame en rose》)、スワン家のサロンの女主人、さらに、Marcel が Elstir のアトリエでみる肖像画 Miss Sacripant という風にあらわれてくるが、これらすべての Odette を同一人と見なすことは、非常に困難なほど、各状況における彼女は違っているのである。Swann にせよ、Charlus にせよ、Albertine にせよ、Gilberte にせよ、Saint-Loup にせよ、ほとんどすべての登場人物は、同様な変貌をとげるのである。かくして、多くの登場人物達は自己の (というより人間の) 性格のもつ多様性をそれぞれの人生の各時期において示しつつ、時のまにまに、流され続けていくのであるが、そうした、結局は、無に帰ってゆく変遷をまぬがれて、本来のゆるぎない自己にたどりついた数少ない人々も、この作品には、存在しているのである。それは、芸術家達、具体的に言えば、Bergotte であり、Elstir であり、Vinteuil であり、そして、Marcel その人なのである。

Swann 家の方に属する人々であれ、Guermantes の方に属する人々であれ、彼らは、皆、一様に、誕生から死へという一つの時の流れに従属していることは明白である。が、しかし、芸術家達にとっては、この流れは、単一のものではない。実生活における彼らは、明らかに、生誕から死への道程をたどるのだけれど、彼らには、もう一つの流れがある。それは、内的な自我から発して、芸術という言葉で表わされる、時の支配をまぬがれたあるエッセンス、ある普遍性に至る流れである²⁾。

私が以下に述べたいと思うのは、それぞれの芸術家における、この二つの流れのあらわれ方であり、常人によっては、踏みこまれることがなく、芸術家達によってのみ踏みこまれるに至ったもう一つ別の宇宙の風景である。一度に二つの道をたどる芸術家は、二つの呼称を持つ。すなわち、生活者と芸術家という二つの呼称である。

1. 実生活と芸術家

“A l'ombre des jeunes filles en fleurs” の中の一挿話は、芸術家の生活と、彼の作品そ

のものとの間の断絶を端的に語っている。それは、Balbec 近郊の馬車の散歩の際の Villeparisis 夫人と Marcel の会話である。夫人は、空に浮かぶ月を指さしながら Marcel が引用してくる作家達を、次々と、揶揄してゆく。生前の Chateaubriand, Vigny, Victor Hugo を知っている大貴族の夫人は、彼らが、実際において、どのようにこっけいであったかを Marcel に細かく語って聞かせる³⁾。作品から得る彼らのイメージと、実生活上のエピソードから得る彼らのイメージは、決して、合一しえないものである。この相反するイメージは、Bergotte の場合にもはっきりあらわれてくる。

Marcel が、Bergotte の作品を読みつつ覚える印象は、彼の全著作に共通な『理想の断章』(«morceau idéal»)に直面しているという印象であり、Marcel が、彼の作品から作りあげる Bergotte の像は、un vieillard faible et déçu qui avait perdu des enfants et ne s'était jamais consolé という具合であった。ところが、Swann 家のサロンに出入りする実際の Bergotte は、黒いあごひげとかたつむり型の赤鼻を持ち、Académie française 会員の席を得ようとして卑屈なふるまいをする男だったのである。さらに、Proust は、Bergotte の実生活上の悪徳、いやしい金銭の問題がからんでいっそうこみいっていると評判されているほとんど近親相姦的な恋愛と、彼の小説にあらわれている傾向、善に対するじつに細心な、じつにいたましい気づかいとの間の矛盾に言及している⁴⁾。

Bergotte の場合は、かくして、実生活者 Bergotte と芸術家 Bergotte が互いに対立しあったまま、平行線をたどっている。

ところが、画家 Elstir においては、Bergotte の場合、平行したまま縦断的に見られた二つの流れが、横断的に示される。つまり、過去における愚かな生活者は、現在の崇高な創造主にとってかわられるといった図式をとるのである。もうひとつ言いかえれば、芸術家における生活者と芸術家の関係が、芸術家における過去と現在という風に置きかえられているのである。

“Du côté de chez Swann”で示される、当時、Biche と呼ばれたかけ出しの画家 Elstir は、Verdurin 家のサロンでは、いつも馬鹿騒ぎの張本人で、恋のとりもちの好きな俗悪な男であった。ところが、何年か経た後、Balbec で、Marcel が実際に彼をおとずれた時、Elstir のアトリエは、彼には、いわば、«le laboratoire d'une sorte de nouvelle création du monde»のように思われ、明らかに、彼は、一個の天才、賢人、すばらしい会話をあやつる哲学者、あらゆるものの上にそびえ立つ超人として現われるのである。卑しい生活者と、非凡な芸術家が、常に、背中あわせにあらわれる Bergotte に対し、Elstir は、Bergotte における卑しい生活者の一面を過去に脱ぎすてきた孤独者として現われて、芸術家における生活の面と芸術の面との深い断絶を彼自身の変身によって説明しているのである。Bergotte においては、芸術的生活は、彼の実生活を支配しうることがなかった。一方、Elstir においては、芸術的生活が実生活の不純さを追放してしまっているのである。少なくとも、Proust は、この二人の芸術家を、そうした対比のもとに描いている様に思われる。

さて、それでは、偉大な第三の芸術家 Vinteuil はどうであろう。我々は、生活者 Vinteuil についての情報を、“Du côté de chez Swann” において、ほんのわずかだけ持つにすぎない。極度に内気な性格、礼儀や情誼に気を配りすぎる性格、娘に対する愛情。それが、すべてである。しかし、Vinteuil の作品は、Marcel によって、くり返し、分析される。それも、ほとんど作曲者 Vinteuil の死後において⁵⁾。Bergotte, Elstir においては、芸術家と実生活の乖離が、非常に強制的に述べられるのに対し、Vinteuil の場合は、明らかに、彼の作品、彼の作品の性質、構造だけが問題になっているように見える。それは、Michel Butorが、彼のエッセ “Les œuvres d’art imaginières chez Proust”⁶⁾ で巧みに分析しているように、Vinteuil の作品、特に、彼の七重奏曲 (septuor) が、“A la recherche du temps perdu” の構造そのものと深く呼応しあっている事実を読者に注意するためであり、作者の死後、“A la recherche du temps perdu” という作品が、Vinteuil の死後に彼の作品だけが不滅の光を帯びて聴衆に訴えかけるのと同一な運命をたどることを暗示するためであるように思われる。

要するに、我々は、Bergotte, Elstir によって、芸術家のうちに、日常の現実生活に本質的に属さない別の持続がある事実を知ることができた。ここで、芸術家における生活者から芸術家へという一つの変身、恐らく、Bergotte においては、日常の各瞬間に行なわれ、Elstir においては、人生の唯一の瞬間に行なわれたに相違ないあの変身、をうながす根本の動機をなおよく観察し、芸術家にとってのもう一つの現実の性格を知ることが必要であろう⁷⁾。

2. 生活者から芸術家へ

我々は、Bergotte, Elstir, Vinteuil の生活者から芸術家へという変貌の具体的な場面を与えられていない。唯、Proust が、彼らの変貌に後で、注釈を加えるばかりである⁸⁾。したがって、実生活におけるこの生活者から芸術家へという飛躍の具体的な場面は、他の人物において眺めなければならない。すなわち、Swann と Marcel においてである。

Verdurin 家のサロンで、Swann は、一度聞いたことがあったまま、その作曲者名も曲名も知らないまま忘れていた一つの楽曲を、再び耳にする。Vinteuil の sonate である。この sonate の楽節 (phrase) が Swann にひきおこす感情は、非常に特殊で、又、甘美なものであった。

«Elle (= la phrase de la sonate) lui avait proposé aussitôt des voluptés particulières, dont il n’avait jamais eu l’idée avant de l’entendre, dont il sentait que rien autre qu’elle ne pourrait les lui faire connaître, et il avait éprouvé pour elle comme un amour inconnu.

D’un rythme lent elle le dirigeait ici d’abord, puis là, puis ailleurs, vers un bonheur noble, inintelligible et précis.»⁹⁾

そして、彼の心のうちには、この sonate が示しているような深い現実には自己の一生を

ささげたいという欲望と、ほとんど熱ともいふべきものが生じるのである。この演奏を聞いていた他の客達の sonate に対する無関心と無理解とを思いあわす時、Swann は、明らかに、生活と芸術との二つの道の交叉点に足を置いたと言いうるのである。

Marcel の場合、この種の場面は、よりひんぱんにあらわれる。petite madeleine の味覚によって彼はすでに、時の支配を脱した深い現実気づいているし、Martinville の鐘塔の与える印象に酔った彼は、その印象をメモするという実際上の芸術的行為をも経験している¹⁰⁾。要するに、Marcel の場合、実生活から芸術への呼びかけは、無意識的記憶 (réminiscence)、事物の深い印象、それに、Swann の場合と同様、真の芸術作品 (特に、Vinteuil の septuor) から得る喜び、によって構成されている。Marcel が、Hudimesnil の三本の木立ちの印象から得る幸福感に酔いつつ覚える感情は、Vinteuil の sonate を聞きながら Swann が感じる感情とほとんど同一である。

«Ce plaisir, dont l'objet n'était que pressenti, que j'avais à créer moi-même, je ne l'éprouvais que de rares fois, mais à chacune d'elles il me semblait que les choses qui s'étaient passées dans l'intervalle n'avaient guère d'importance et qu'en m'attachant à sa seule réalité je pourrais commencer enfin une vraie vie.»¹¹⁾

しかし、Swann は、Vinteuil の sonate が啓示した真の現実を形象化しえないまま、すなわち、生活者あるいは、amateur から真の芸術家に変貌することなく、世を去るのである。

«Même quand on ne tient plus aux choses, il n'est pas absolument indifférent d'y avoir tenu, parce que c'était toujours pour des raisons qui échappaient aux autres. Le souvenir de ces sentiments-là, nous sentons qu'il n'est qu'en nous; c'est en nous qu'il faut rentrer pour le regarder.»¹²⁾

と、Swann は Marcel に語るなのであるが、こうした事柄をよく理解していながら、それを自我の外に形象化し得なかった Swann と、Guermantes 邸の不揃いな敷石の啓示をきっかけに決然と自己の天職 (《vocation》) に身をささげる Marcel との間の差はどこにあるのであろうか。同じように芸術の地平をかいまみながら、一方は不毛に終り、他方は花開く、この両者の間に、恐らく、芸術家の変身にとっての必要条件がひそんでいるのである。

Proust によれば、それは、他の人達よりすぐれた知的要素や社会的洗練といったものではない。Proust が、Bergotte をひきあいにして一般的注釈を加えるように、その条件とは、「ものを反射する能力」(le pouvoir réfléchissant) である。Proust の比喩に従えば、空中にのぼるためには、地面にそって走り続ける力をすべて上昇力に転換する発動機が必要なのと同様に、天才的な作品を生む人々にとっては、《le pouvoir, cessant brusquement de vivre pour eux-mêmes, de rendre leur personnalité pareille à un miroir》が必要なのである¹³⁾。Marcel に具わっていて、Swann に欠けていたもの、それが、この能力である。しかし、この《pouvoir réfléchissant》は、ただ単に、何の選択もなしに、無条件にもの

を反射するのであろうか。恐らく、各芸術家によって、この反射の仕方は異なるはずであり、それが、芸術家の個性というものであろう。この点に示唆を与えるのが Elstir の生涯から出てくる言葉である。彼に従えば、芸術家の反射能力の違いは、芸術家の叡知 (sagesse), ものの見方の質的差違である。巨匠 Elstir が, Verdurin 家のサロンの俗悪なメンバー, Biche から彼の芸術への道を踏み出したことは理由のないことではなかった。Elstir は, Marcel に次の様に語る。

«Il n'y a pas d'homme si sage qu'il soit, qui n'ait à telle époque de sa jeunesse prononcé des paroles, ou même mené une vie, dont le souvenir lui soit désagréable et qu'il souhaiterait être aboli. Mais il ne doit pas absolument le regretter, parce qu'il ne peut être assuré d'être devenu un sage, dans la mesure où cela est possible, que s'il a passé par toutes incarnations ridicules ou odieuses qui doivent précéder cette dernière incarnation-là... On ne reçoit pas la sagesse, il faut la découvrir soi-même après un trajet que personne ne peut faire pour nous, ne peut nous épargner, car elle est un point de vue sur les choses.»¹⁴⁾

Elstir が, (さらには, 芸術家達が) 万人に共通の生活の諸要素から, その生活を凌駕するなものかを引き出し得るのは, そうした化身 (incarnation), 叡知 (sagesse) を求めての旅を経た後である。Biche と Elstir の間には, こうした過程がひそんでいるのである。

かくして, Marcel と Swann において生活から芸術への転身の契機の具体的場面を知ることができたが, この転身が実現されるための条件として, 芸術家の「反射能力」(le pouvoir réfléchissant) あるいは, 「叡知」(la sagesse), さらに, そこに至るまでの「化身」(l'incarnation) というものがあつた¹⁵⁾。それでは, こうした条件をそなえた芸術家が最後に到達する世界はどんなものであろうか。この現実世界とは違ったもう一つ別の世界の性格を, 我々は, ここで, 知るべきであろう。

3. 芸術家の故国

内的自我から発して芸術へと向かう, 生涯, 生活人としてとどまる人々にとっては無縁の, 芸術家に固有のあの mouvement は一つの明白な性格を持っている。それは, これら芸術家の内的持続が, 現実生活に対しては, その本質上, 絶対, 無償のものであるという性格である。そうして, この芸術家の内的現実の無償性という属性は, そのまま, 芸術家の故国 (la patrie) という概念に結びつく。それは, Bergotte の死をのべた次の一節によっても知ることができる。

«... il n'y a aucune raison dans nos conditions de vie sur cette terre pour que nous nous croyions obligés à faire le bien, à être délicats, même à être polis, ni pour l'artiste athée à ce qu'il se croie obligé de recommencer vingt fois un morcean dont l'admiration qu'il excitera importera peu à son corps mangé par les vers... Toutes ces obligations, qui n'ont pas leur sanction dans la vie présente, semblent appartenir à un monde différent, fondé sur la bonté, le scrupule, le sacrifice, un monde entièrement différent de celui-ci...»¹⁶⁾

この判断は、具体的作品の分析から出てきた考えというより、むしろ、Proust が、芸術家の労苦に一つの説明を与えようとした一般的な意見である。

ところで、この“現実世界と異なる世界”という概念、一種神秘的な調子が、“A la recherche du temps perdu”で最も色濃く示されているのが Vinteuil の作品である。彼の sonate は、すでに、Swann にとって、《de véritables idées, d'un autre monde, d'un autre ordre, idées voilées de ténèbres, inconnues, impénétrables à l'intelligence, mais qui n'en sont pas moins parfaitement distinctes les unes des autres, inégales entre elles de valeur et de signification》¹⁷⁾を示すものとしてあらわれていた。Vinteuil の septuor に耳を傾ける Marcel は、その独自の調べに、はっきり、芸術家の故国といったものを感じている。

《Ce chant, différent de celui des autres, semblable à tous les siens, où Vinteuil l'avait-il appris, entendu? Chaque artiste semble ainsi comme le citoyen d'une patrie inconnue, oubliée de lui-même, différente de celle d'où viendra, appareillant pour la terre, un autre grand artiste.... Quand la vision de l'univers se modifie, s'épure, devient plus adéquate au souvenir de la patrie intérieure, il est bien naturel que cela se traduise par une altération générale des sonorités chez le musicien, comme de la couleur chez le peintre.》¹⁸⁾

かくして、芸術家の style の違いが、彼らの故国の風土の違いを示すものにほかならないとすれば、後に、Marcel が悟るように、《le style est une question non de technique mais de vision.》¹⁹⁾ということになってくる。芸術家は、すべての人々にとって自我のそとに形象化されることのないところのもの、もしも芸術が存在しなかったなら、各人の永遠の秘密として残るであろうところのものを、その絶対的無償性において、自己の外に投影するのである。

芸術家の深い自我に結びついた真実、芸術家の魂の実相と深く照応しあったもの、それこそが、まさに、芸術家にとっての真の現実であり、Proust が、芸術家の故国 (la patrie) と呼ぶところのものである。

Vinteuil の 霊 妙 な 楽 節 が Marcel の 心 の うち に 呼 び さ ま し た も の は、Petite Madeleine の 味 や、Martinville の 鐘 塔 や、Hudimesnil の 木 立 が 彼 の うち に 呼 び さ ま し た も の と 同 種 の も の で あ っ た と い う 事 実 に 注 意 し よ う。Petite Madeleine、即ち、無意識的記憶 (réminiscence)、Martinville の 鐘 塔、即ち、事物の深い印象、が、Marcel の うち に 呼 び さ ま す の は、常に、時の支配をまぬがれて、事物のエッセンスを糧として生きる、あの永遠の自我であったという事実。芸術家の故国とは芸術家が一度失って再び見出した楽園であり、永遠性そのものなのである。

結局、真の芸術家においては、二つの流れは、彼らの内的故国において合流し、彼らの「反射能力」によって作品化されるのである。

〔註〕

- 1) 例えば、Georges Poulet が、“Etudes sur le Temps Humain”の中で、この点に触

れている。

《...Aussi, rien n'est-il plus faux que de comparer la durée proustienne à la durée bergsonienne. Celle-ci est un plein, celle-là, un vide; celle-ci un continu; celle-là, un discontinu...》. さらに p. 396~397参照。

- 2) この点では, Léon Pierre-Quint の次の意見に示唆を受けた。

《...l'œuvre est si magnifiquement construite que sa conclusion est déjà enfermée dans le point de départ et n'est qu'un épanouissement. Elle est tout entier dans les deux thèmes de l'inconscient et de l'évolution. L'un va du souvenir à l'art, l'autre de la naissance à la mort, le premier se développe dans notre durée intérieure, le second dans le temps. Et Proust nous apprend que tout ce qui est dans le temps est perdu, ce qui est dans notre durée est une richesse retrouvée.》

Marcel Proust sa vie, son œuvre p. 154.

- 3) A la recherche du temps perdu. Tome I. p. 721~723 (Bibliothèque de la Pléiade. 3 vols) 参照。
- 4) Ibid. p. 558.
- 5) Vinteuil の死は, すでに “Du côté de chez Swann” の中で告げられている。(I. p. 159). Marcel は, まだ少年である。
- 6) Butor は, このエッセーの中で, Vinteuil の sonate, Elstir の 絵 (とりわけ, “Le port de Carquethuit” と題された絵). Vinteuil の septuor の細部を細かく検討しつつ, Proust がつくり出したこれら imaginaire な作品群と, “A la recherche du temps perdu” の構造そのものとの緊密な連関に説明を与えている。特に, “A la recherche du temps perdu” が, Proust の当初の予想を越して異常に膨張していったという周知の事実と, Vinteuil の作品が, この膨張に呼応して変化しているという指摘は, 興味深い。
- 7) 真の意味でのこの点の究明 (芸術家の内部のデモンについての究明) は, 又, Proust 自身が, いかにして, 芸術の世界へ押しやられるに至ったかという問題に一つの暗示を与えうることになるだろうと思われるが, それは, この論の範囲をこえる問題である。
- 8) 厳密に言えば, ここで問題になるのは Elstir である。Vinteuil は, “Du côté de chez Swann” で, すでに, その死が伝えられており, Bergotte は生活者 Bergotte と芸術家 Bergotte が表裏をなしていて, 生活者から芸術家への明確な飛躍をとげているのは, Elstir だけだからである。しかし, Elstir のこの変身も, 彼の生涯のどの時点で, どんなきっかけでなされたかは, 具体的には, 示されていない。
- 9) I. p. 209~210.
- 10) Petite Madeleine については, I. p. 44~47. Martinville の鐘塔については, I. p. 180~182 参照。

- 11) I. p. 718.
- 12) II. p. 703.
- 13) I. p. 554~555.
- 14) Ibid. p. 864.
- 15) 芸術家の条件として, le pouvoir réfléchissant, l'incarnation, la sagesse があげられようが, Proust は, 又, 別に, 芸術家というものを運命論的に見ている点もある。
《...D'ailleurs, elle n'eût pu lui servir, car cette phrase pouvait bien symboliser un appel, mais non créer des forces et faire de Swann l'écrivain qu'il n'était pas.》 (III. p. 878) Swann は, 作家 (芸術家) になる運命をもたなかったというわけである。
- 16) III. p. 187~188.
- 17) I. p. 349.
- 18) III. p. 257.
- 19) Ibid. p. 895.